# 019

# 好む枝から見える性差と造形表現の関連

宇佐美明子

(国立音楽大学)

## 【研究目的】

これまでの「立体造形における性差」の研究 (1) (2) の中で女児と比較し、男児がより道具に関心を持ち空間に作用しながら立体的な作品を作り上げる傾向がある事を指摘してきた。また、女児の場合は立体造形においても比較的平面的であり、緻密で装飾的な表現が観察されている。また、大きく危険な道具への関心は薄い。

本研究では「好きな枝を拾う」という調査を行なった。これは幼児の道具(武器)への関心と愛着、道具の種類、扱い等をさぐるものである。これまでの研究背景を確認する意味をもち、男女児一般の造形活動の傾向をより明らかにするものとして意義がある。

# 【調査方法】

#### [調査方法]

「好きな枝を一本拾ってきてね」と言葉がけする。 拾集の様子を観察する。

拾集後、それぞれの枝の長さと太さを計測する。

\*棒という言葉はある特定の長さや太さをイメージさせるので使用しなかった。

## [調査対象]

平成10年12月9日

#### 東京都杉並区中瀬幼稚園

年少児クラスA男児20名竹の子村女児 6名

年中児クラスB、C 男児27名 園庭

合同 女児14名

年長児クラスD、E 男児19名 園庭、および 合同 女児21名 竹の子村

- \* 園庭は低木を含む樹木があるが、清掃され落ちている枝は少ない。
- \*竹の子村は竹林を主にした雑木林、枝はたくさん落ちている。

#### 【調査結果】

枝の長さ太さの計測結果は次の(表1)(表2)に まとめた。

年少児→たくさんの枝が落ちている雑木林では、ゆったりと時間をかけ遊びながら拾っていた。長い枝を

(表1) 好まれる枝の長さ太さの平均値

		長さ	太さ	
年少	男児	70.6	4. 7	
	女児	34. 7	3. 8	
年中	男児	32. 5	3. 7	
	女児	20.9	2. 9	
年長	男児	73.4	11.2	
	女児	31.0	3. 2	

単位=cm

(表2) 好まれる枝の長さ太さのそれぞれの最長値と最短値

		長さ		太さ	
		最長	最短	最長	最短
年少	男児	250	10	18. 7	1
	女児	7 3	1 2	6. 6	1. 8
年中	男児	141	6	18. 2	1
	女児	4 3	6. 4	5. 1	1. 2
年長	男児	186.8	7. 4	7 3	2
	女児	6 9	1 6	9. 6	1. 1

単位=ロ

2人の男児が肩にかついで運んだり(共同作業)、弓を射るような形で枝を持つ男児(武器)がいた。また、枝の先にヒラヒラをつけると、ほうきになるのだといって地面をはくまねをしたり、枝を持って踊っていたのは女児であった。計測の結果、長さでは倍の値になった。

年中児→園庭にはあまり枝が落ちていなかった。しかし少しでも長い枝を欲しがる男児は女児に比べ長い時間を使用して探していた。この男児のうち7名がヤツデの茎(40㎝前後)を拾ってきた。竹の子村(雑木林)ほどではないにせよ、女児との長さの差は歴然としている。

年長児→園庭と竹の子村を自由に行き来して好みの枝を拾っていた。男児4人が竹を拾い、男児1人が丸太をころがしてきた。これで太さの平均値が高くなっている。長さは2.4倍、太さは3.5倍と調査中もっとも大きな差が観察された。

年少、年中、年長の共通点で顕著なのは、女児と比較し男児の枝が長さ太さともに非常に高い平均値を示したことである。調査中あまりの分量の違いに一見して計測結果が推測されるほどであった。

さらに注目すべきは、年長男児の太さの最短値以外 すべての値において、もっとも長い枝を拾ってくるの が男児なら、もっとも短い枝を拾ってくるのも男児で あった。また、ヤツデの茎、竹、丸太などバラツイた 種類の枝を拾うのもすべて男児である。その点女児は 一般に考えられるイメージどうりの枝を揃えていた。

拾った枝の利用方法も幾例か観察されたが、特徴的 だったのは男児は枝を持って戦うしぐさをするが、女 児には見られなかったことである。

#### 【考察と結論】

園庭と竹の子村の環境の違いと、年令の違いを超越 して圧倒的に男児の数字が高いことに驚かされる。長 く太い枝に愛着を持つのは男児であるのは明白である 。この数字を保育環境の違いと考えるべきだろうか。

幼児は日常生活の中で、保育者(特に母親)から棒 は危険と繰り返し注意を受け、友達を傷つけないよう に取り上げられ、しつけられていると想像される。す なわち環境の影響を受けなかった場合、前述の数字は さらに増える可能性があることを指摘したい。

なぜ男児はこれほどまでに、長く太い枝を好み武器 として扱う行動を見せるのだろう。女児はなぜ長さ太 さに執着せず、武器として扱わないのだろうか。また 、枝の種類や最長最短の調査結果にみる、男児のバラ ツキと女児の均一性はどこからくるのだろうか。

)(2)や先行研究(3)との共通点を次の(表3)にまと め、比較考察を試みた。

・包装紙で作られる剣を年少から順に追っていくと男 児の場合、経験を積むにしたがって固く鋭く長くなっ ていくが、女児は柔らかく太いままである。男児のよ うに固く鋭く長くすることに執着しない。男児の剣の イナスのイメージで対応する性質を女性保育者(母親 用途は武器である。女児の場合は先端に星や花をつけ を含む)にみることが多いが、自分の好みとは違った た魔法の杖であり、新体操のリボンになる。

で、男児が大工道具を持ち出し竹を切ったり削ってい を熟慮し、上手にその能力をのばしていく知識と経験 る様子を観察することは珍しくない。時として保育者 顔負けの技術を持つ男児もいる。金属性の道具に興味 を持つ男児は多い。

・紙工作でもお絵描きでも、女児はそつなくまとめあ げ仕上がりが美しい。集中力のある作品とそうでない 作品のバラツキが男児には多くみうけられる。

・同じ彼岸花の課題画を描かせても男児は毒の根元、 女児は花の部分を好む傾向がある。

以上のように好まれる枝の調査から得られた結果は

(表3) 好まれる枝と造形活動の共通点

	好まれる枝	自由画	立体造形 その他の遊び
男児	長い太い (大きい重 い)	強いもの大きいものを好 んで描く 固く重い色(寒色、低明 度色)を好んで使う メカニック(金属)なモ チーフ	ブロックを組み合わせて 立体的で大きい形を作り 出す 大きく固く重いハシゴ遊 次に執着する 大工道具や金属性のパイ プなどを好む
	種類が多い (固体差、 バラツキ)	嗜好色は分散傾向(個人 差がある) モチーフ、構図が多種類	ハシゴ遊びの種類が多い
	武器として 扱う	モチーフに人工物が多い 闘争場面が多い	包装紙の剣を作る ブロックで武器を作る スピードがあり乗客を振 り落としながら走るハシ ゴ電車
	ダイナミッ クな共同作 業		砂遊びのダム作り ジャングルジムと滑り台 にハシゴの橋をかける
女児	短い細い ( 小さい)	可愛らしいもの、小さい もの志向	ブロックの組み立てには 消極的で、単一的な形で 利用する 大きく固く重いハシゴに <b>馴染</b> みにくい
	種類の均一性(等価性)	すべてのモチーフに等価性が強い 色を一画面に平均して使用する傾向 モチーフ、構図の種類がすくない	同じハシ <b>ゴ遊び</b> を反復す る
	武器として 扱わない	モチーフに人工物は僅少 闘争場面はほとんど見ら れない 楽園志向	包装紙で作るものは魔法 の杖などであり剣ではない 皆仲良く集うための平和 なハシゴ電車

、様々な点において幼児の造形表現にみられる性差の 特徴に合致することが分かった。

今回の調査では大変大きな数値の差がでた。男女児 本調査から得られた問題点とこれまでの研究結果(1)の価値感の違いが最も顕著な領域だったに違いない。 これは何が遠因となっているのだろうか。医学や心理 学の立場からのご意見を伺いたいと思う。

#### 【おわりに】

棒をふりまわす男児を乱暴、協調性がないなどのマ ところで男児の充実した達成感が得られることも多い ・自由時間に女児がお絵描きやおりがみをしている横 と考えるべきである。叱る前になぜ棒に執着するのか を持つことが肝心ではなかろうか。

#### 引用文献、参考文献

- (1) 宇佐美明子「幼児の立体造形における性差(1) 一 道具の扱いから 一 」武蔵野女子大学幼児教育学会研究集録 第16集 1994年 宇佐美明子「幼児の立体造形における性差(2) — 道具の
- 道具の扱いから 一 1 日本保育学会 第47回大会研究論文集 1994年
- 宇佐美明子「幼児の立体造形における性差(3) 道具の扱いについて 一 」日本美術教育連合研究紀要 第28号 宇佐美明子「幼児の立体造形における性差(4) -- 日本と台湾の道具の
- 扱いについての比較研究 一 」武蔵野女子大学紀要 第30号 1995年 (2) 宇佐美明子、皆本二三江「道具の扱いの性差にみる幼児の造形活動の基本 的性質について ― ハシゴ遊びと立体・平面造形の関連をとおして ― 」 武蔵 野女子大学幼児教育学会研究集録 第18集 1996年
- (3) 皆本二三江編著「0歳からの表現・造形」文化書房博文社 1991年